

支え合いマップ作りは ご近所発の地域福祉 の実践だった

- 1.地域には4つ目の層があった／2
- 2.要援護者はご近所に居る／4
- 3.ご近所福祉活動の利点／6
- 4.なぜマップが必要なのか／7
- 5.ご近所発の地域福祉の進め方／8

住民流福祉総合研究所（木原孝久）

350-0451 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話 049-294-8284

ホームページ <http://juminryu.web.fc2.com/>

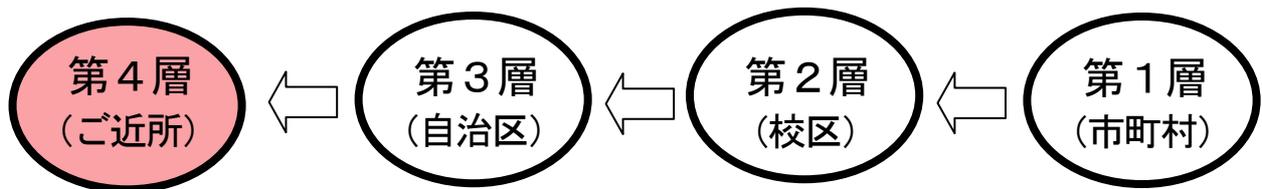
1. 地域には4つ目の層があった

(1)地域は3つの層（圏域）でできている？

私たちが生活している地域はじつは、いくつかの層（圏域）でできている。いちばん大きな層が市町村域でおよそ数万世帯。次いで校区（数千世帯）、そして自治区（町内、数百世帯）。それぞれに福祉を推進する組織が設置されている。

(2)じつはもう1つの層「ご近所」（約50世帯）があった！

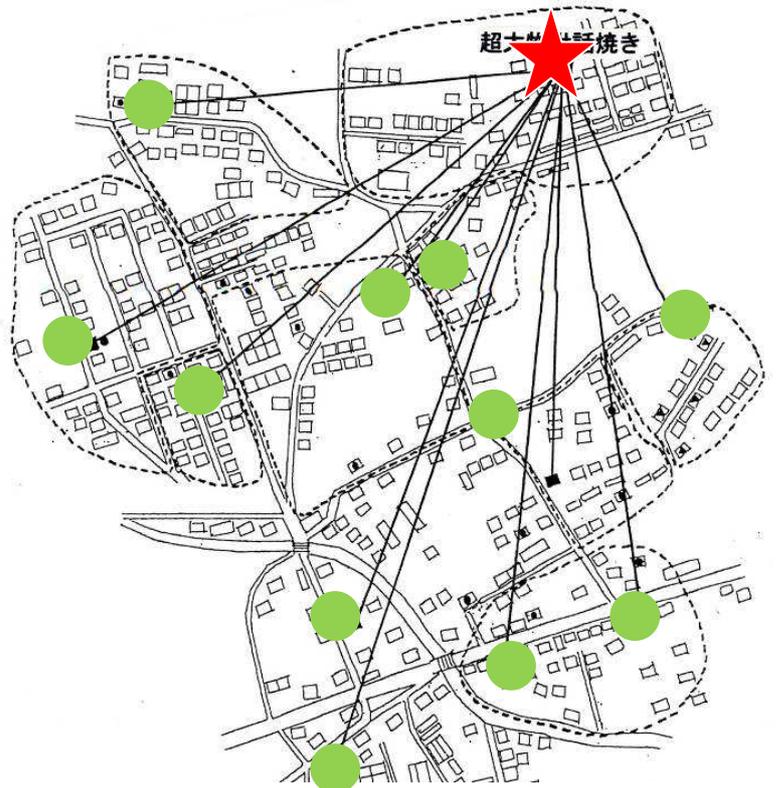
ところが、よく調べると、第3層のあとにもう1つ、4つ目の層があった。30～80世帯（平均50世帯）。ここを「ご近所」と呼ぶことにした。ここが地域の福祉を進めるときに極めて重要な役割を果たしていることがわかったのだ。



(3)「私が見えるのはこの範囲だけ」

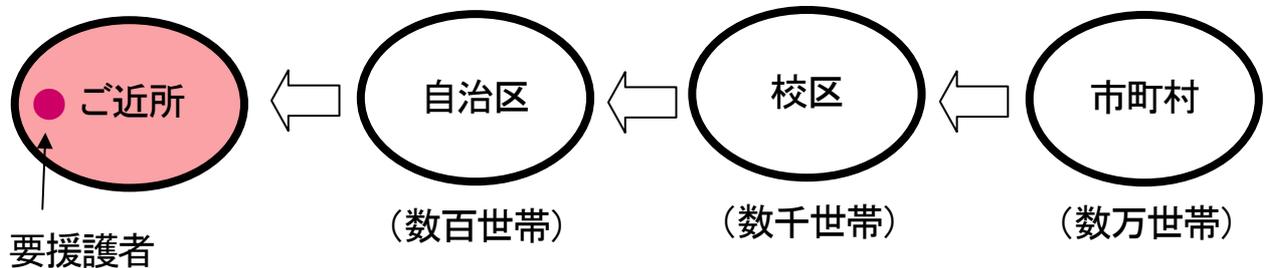
下のマップは長野県内の数百世帯の自治区。ここで活躍中の世話焼きさんに聞いてみた。「こんなに広い地域の福祉問題がよくわかりますね」。彼女は「とんでもない。私が見えるのは足元だけ」と自宅周辺を点線で囲った。その他の地区は、それぞれ問題が見える人を探して、アンテナ役になってもらっていると。

彼女は「ご近所」の存在に気づいていた。



③ご近所では世話焼きという、人の面倒を見る天性の資質の持ち主が活躍している。この人はご近所でのみ行動している。だからご近所は人材の宝庫だ。④隣人同士が助け合っている。おすそ分けとお返しの繰り返し。つまり双方向である。しかも相性の合う者同士という条件がある。⑤単に要援護者を見守るだけでなく、送迎サービスまでしている。その際、事故が起きたらなどとは考えない。お互いの自己責任と信頼関係でなされている。私的な関係だ。

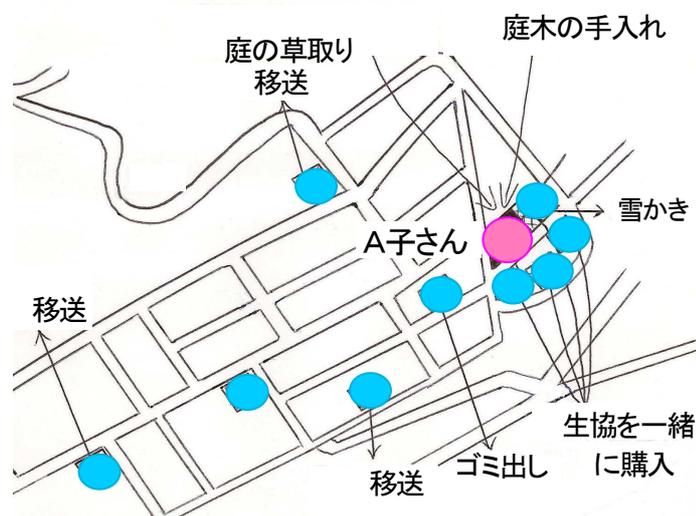
2. 要援護者はご近所に居る



(1) 要援護者はご近所で生活し、ここから出られない

ご近所が重要なのは、要援護者はここに居るという事実から来ている。要援護者は、その心身の状況からご近所外に出かけるのが辛い。自治区でサロンを開いても行けない。ご近所が否応なく彼らの生活圏になっているということである。

下のマップ。老々で共に要介護という大変な家だが、奥さん（A子）が「助けられ上手さん」で、周りの人にあれこれお願いしていた。あなたはゴミ出しを、あなたは庭木の剪定を、あなたはバス停まで私を送ってとか。彼女が声をかける範囲はこの程度なのだ。



(2)だからご近所福祉の充実を最優先にしないで…

彼らはできれば施設に入らず、ここで自立した生活をしたいと言っている。国も要介護者の自立生活を支援せよと言っている。その自立生活に不可欠なのが、ご近所の人たちの見守りや、ちょっとした支援なのだ。

となると、私たちが優先的に取り組まねばならないのは「ご近所福祉」の充実ということになる。

(3)当事者主導、住民主導の姿勢になれるか？

「ご近所福祉の充実を最優先に」と考えるには、福祉関係者がよほど当事者主導の姿勢にならなければならない。当事者の意向をとことん尊重する気になれるか。また住民主導の助け合いを尊重する姿勢になれるか。

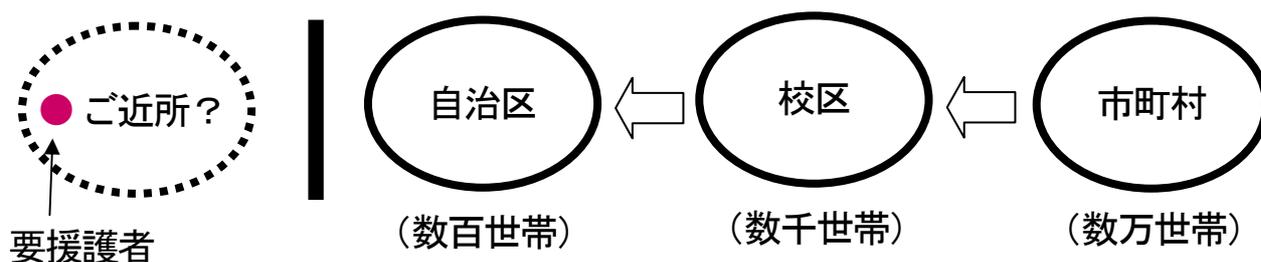
(4)担い手主導、推進者主導で徹底している今の地域福祉

福祉関係者は、当事者がいる「ご近所」から最も遠い「市町村域」にいて、そこで推進組織を作り、福祉ニーズを推測し、サービスを作り、担い手を養成し、グループを作り、ニーズがここまで上がって来るのを待っている。だが、どれほどのニーズがここまで上がって来るだろうか。

(5)「ご近所」を知らずに地域福祉を推進する不可解

あらためて考えてみれば、不可解なことである。福祉の対象たる要介護者は「ご近所」に居て、足元の人たちに頼っている。だが、その「ご近所」の実態が、要介護者の存在と共に、まったく把握されないまま、地域福祉が進められているのだから。

それに要介護者が、まずもってご近所の支援に期待しているとしたら、要介護者とその人に関わるご近所さんをセットで把握し、それを邪魔しないように側面・後方から支援することが求められる。



3.ご近所福祉活動の利点

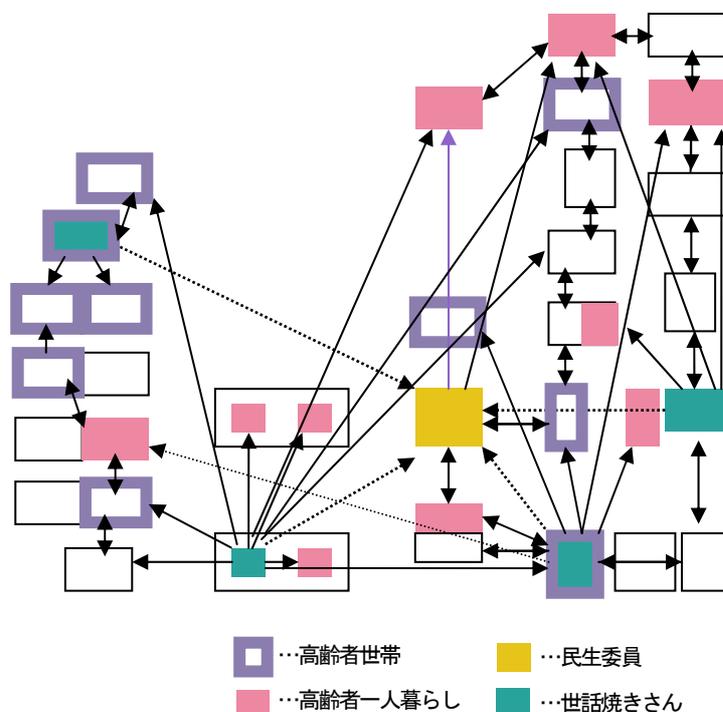
ご近所ごとに福祉を進めるとしたら、いろいろメリットがあることが判る。

(1)世話焼きさんが活躍している

地域の最大の人材である世話焼きさんは大部分、ご近所で活躍している。このメリットは大きい。これ以上広い圏域では活動しにくいようだ。

右のマップでは、緑色の人たちが主な世話焼きさんだ。

最下段の、つながりの線が10本以上引かれている人が大型世話焼きさん（2人）。中段から上の両脇に4～5本出ている人が中型世話焼きさん。その他、2～3本の人たちが小型世話焼きさんということになる。



(2)問題が見えやすい

世話焼きさんが関わる相手は自宅のすぐ近くの人ばかり。その相手の状況ならわかるし、虐待なども見える。

(3)深刻になる前に対処

日常的に関わっているので、予兆も掴みやすい。だから事件を未然に防止できる。

(4)生活の中で要援護者に関われる

わざわざ福祉センターに行く必要はない。生活の中で接したニーズに、そのまま対処すればいい。だから誰でも活動できる。

(5)緊急事態にも即応できる

夜中でも大丈夫。災害の際も、救援に駆けつけられるのは向こう三軒両隣の人だ。

(6)要援護者も、足元からなら資源を発掘・活用しやすい

要援護者自身のご近所から、自分に必要な資源を発掘し、活用している。

4.なぜマップが必要なのか？

(1)ご近所の助け合いは見えない

関係者は、ご近所で助け合いなど行われていないと言うが、それも道理で、住民は水面下で助け合いをしているのだ。人に助けてもらおうということは、本人にとってはプライドの危機であり、なるべく見えないように助けてほしいと願っている。当事者主導のご近所では、特にこれが助け合いの大事な要件になっているのだ。

(2)支え合いマップを作ると見えてくる

当事者にとって大事なご近所の福祉を充実させるには、まずもってご近所で住民がどのように助け合っているのかを把握しなければならない。そのうえで、その助け合いをさらに充実させればいいのだ。

ところがご近所の助け合いは、外からは見えにくい。どうすればいいのか。そこで私共は支え合いマップを開発した。

①なぜマップを作ると見えてくるのか。

一人の人が見える範囲はどれぐらいだろうか。その場合の「見える」とは、助け合いの実態である。誰がだれの家に行っている、誰がだれにおすそ分けを持っているといった住民の関わり合いについて、一人の人が見える範囲は、およそ5～10世帯であるようだ。

②マップづくりはご近所毎にする。

50世帯のご近所を5つに分けて、その一つ一つの小ご近所から一人が参加してくれればいい。5人の情報を合わせていけば、かなり見えてくる。

③その5人の資質も大事になる。

人の関わり合いは、誰でも見えるわけではなく、見える人と見えない人がいる。それに詮索好きでないと駄目で、こうなると男性はかなり不利になる。

(3)マップで何を「見る」のか？

ただ「見える」と言っても、一体何を見ようとするのか。何を探すのか。

①マップづくりには2種類ある。

一つは、一般的に「福祉マップ」または「要援護者マップ」と呼ばれるもので、

これは要援護者に印をつけるだけだ。見つかった要援護者に関わるのは福祉関係者なので、それ以上の情報は必要ないということだ。

もう一つが「支え合いマップ」で、こちらは要援護者とともに、その人に誰が関わっているのかも調べる。その上で、その関わり合い全体を支援していこうというもので、こちらは住民の支え合いを第一義に置く。

②ご近所福祉の課題も抽出する。

より良いご近所にするために、どんな課題があるのかも考える。そしてその解決のヒントまでも、マップづくりの中から探し出す。住民の誰かがすでに解決努力をしているはずなのだから、それも大事にする。あくまで住民主導の問題解決策なのだ。

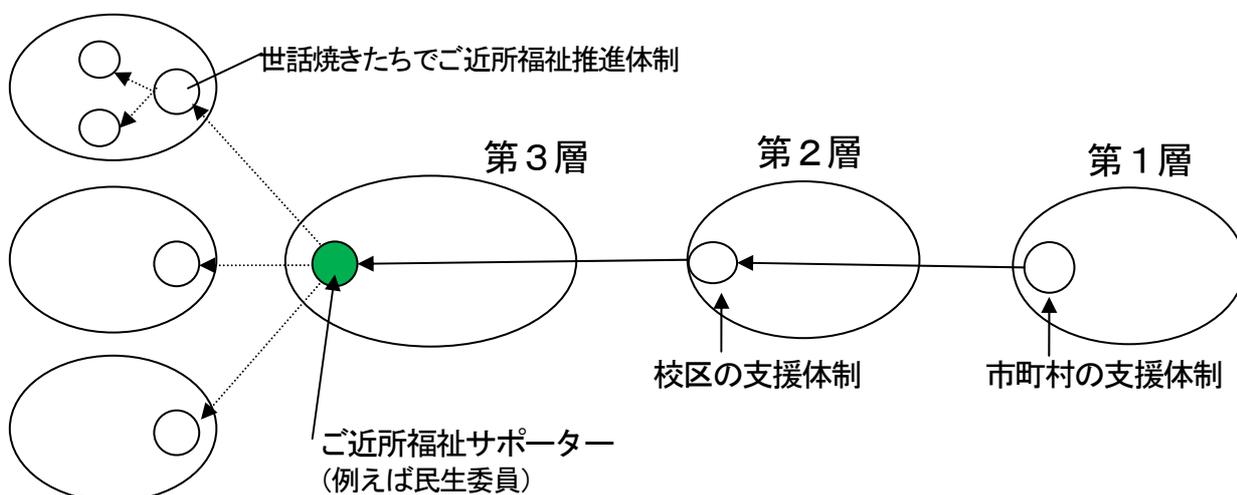
5.ご近所発の地域福祉の進め方

ご近所福祉は基本的にはご近所の世話焼きさんたちで担ってもらうが、その前にこれを支援するのは誰かを決めなければならない。この人が事実上の地域福祉のキーマンとなる。ご近所発の地域福祉のもう一つの特徴はここにある。

(1)「ご近所福祉サポーター」はだれが？

①ご近所を支援する資質のある人とは？

ご近所活動を支援するには、ご近所の人たちと日常的に接触していなければならない。そうすると、自治区にいる人ということになる。ここには民生委員がいる。同時に上層の関係者とも日常的に接触できる人でなければならない。



②ご近所毎に選定するか、市町村全域で統一するか？

ご近所福祉サポーターを、自治会にするか民生委員にするか、それとは別に地域の中から人材を探すか、その市町村の事情を勘案して検討する。例えば民生委員に統一するか、あるいはご近所毎に人選方法を変えるか。大事なことは、ご近所福祉サポーターは、地域福祉全体の中で最もその資質が問われる役割だということだ。
ここに人を得なければ、地域福祉全体が機能しない。

(2)モデルご近所を特定する。

ご近所サポーターの傘下のご近所から、まず一つのモデルご近所を特定する。一つの自治体に6～10程度のご近所がある。その中からやり易いご近所を選定する。世話焼きさんが複数いて、ご近所福祉推進体制がすぐにできそうなご近所とか。

(3)支え合いマップづくり

ご近所内の世話焼きさんの精鋭とご近所福祉サポーター、それに関係した自治会、校区、市町村社会福祉協議会などが参加してもいい。各層から参加すれば、抽出された取り組み課題の中から、自分の層が担うべきものを持ち帰れる。

(4)取り組み課題を各層に「振り分け」

マップで出てきた取り組み課題を分解し、それぞれを担うにふさわしい層に振り分ける。上記の通り、各層の関係者がマップ作りに参加すれば、各自が自分の層が担うべきものを持ち帰れる。

(5)取り組み課題を「一般化」して各層へ分配

取り組み課題の少なからずが、他のご近所でも使えるはずだ。それを抽出して、マニュアル化する。この作業は、相当の能力が求められる。これをだれが担うか。

一般化されたマニュアルは、すべてのご近所に分配する。各自治会が受け取って傘下のご近所に分配する、また校区も傘下の自治体に分配するというようにして、4つの層をフルに生かして、すべてのご近所に分配されればいい。もっと簡易的に行うなら、ご近所福祉サポーターたちのネットワークで分配するという方法もある。

(6)ご近所福祉推進体制づくり

マップづくりの中で、これを担うにふさわしい人材が見つかる。マップづくりに参加した人やマップづくりで浮かび上がってきた世話焼きさんなど。この人たちでご近所福祉推進体制を作ってもらおう。ご近所毎にご近所の世話焼きさんたちで推進してもらおうのだ。だからご近所が何百とあっても、手に負えないということはない。要はご近所福祉サポーターが支援しなければならない相手は、民生委員なら5つ程度なのだ。

またご近所でてきた課題は、原則としてご近所で対応するように努力する。そうしないと、ご近所の連帯や助け合いは育たない。問題が出てくるたびに上層のNPOなどに依頼するようでは、ご近所体制を作る意味がない。

(7)第1層、第2層、第3層は各自、ニーズ対応の体制づくり

ご近所発の地域福祉では、地域の福祉ニーズはご近所から発掘する。そこに要援護者がいて、日常的にニーズを発信しているから、ご近所でのニーズ発掘は理に叶っている。そのニーズについて、まずご近所でどう対応するかを考えた上で、他の層が担うべきことも合わせて抽出し、各自で持ち帰るということになる。

その「持ち帰り」と「ニーズへの対応」を繰り返すことで、それぞれの層なりに、これから出てくるであろうさまざまなニーズに効率的に対応できる体制を作っていくことができる。

今は担い手主導・推進者主導だから、初めから担い手や推進組織の手で協議会などを作ってしまうが、こういうやり方は変えていく必要がある。

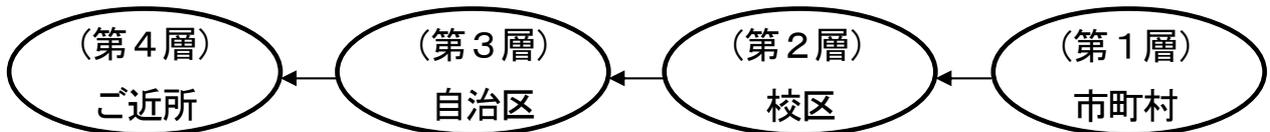
ご近所発のニーズ対応で求められるのは、①どんなニーズにも素早く対応できる行動力、②問題解決力のある人材、③阿吽の呼吸で連携できる人間関係、④有力な資源を発掘・活用できるネットワーク力だ。ただ肩書だけで多くの専門家を集めても、それが機能しなければ意味がない。

2種類の地域福祉—あなたはどっち？

「当事者・住民主導」型と「担い手・推進者主導」型

当事者主導の福祉

＜当事者の意向に従って＞



- ①ご近所（第4層）に当事者がいる
→自立生活のためご近所の支援に期待
- ②ご近所福祉の充実が最優先
→ご近所に推進拠点を置く必要
- ③世話焼きがいる（ご近所は人材の宝庫）
→世話焼きたちでご近所福祉推進体制
→民生委員・自治会がサポート
→フォワードからミッドフィルダーへ
- ④助け合いはご近所でだけ
→住民流で助け合い（住民流に従え）
- ⑤第4層でニーズと資源をセットで発掘
→要援護者が自ら発信
- ⑥助け合いは見えない（水面下で活動）
→マップをつくると見える
- ⑦ニーズを抱えた要援護者は足元で解決
- ⑧課題は各層へ振り分け

担い手主導の福祉

＜担い手の側からつくる＞

- ①ここに当事者はいない
→当事者はご近所でニーズ発信
- ②まず第1層の福祉体制の充実へ
→まずは第1層に推進拠点
- ③関係者（機関）が集中
→保健福祉関係者で推進体制
- ④ご近所の存在を知らずに地域福祉
→要援護者の行動も助け合いの実態も分からないで？
- ⑤第1層でニーズ発掘、サービス作り
→マップを作る必要はない
- ⑥助け合いが見える必要はない
→マップづくりの必要はない
- ⑦ニーズを抱えた要援護者は上層へ
- ⑧課題は上層だけで対応